

緒言

宗圓 聰

近畿大学医学部奈良病院整形外科・リウマチ科

骨粗鬆症に関しては、診断基準や各種ガイドラインが相次いで発表され、とともに新たな薬剤も次々と登場してきた。現在わが国の「骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン」が改訂作業中ではあるが、新薬の登場も少し時間が空くことから、現時点での骨粗鬆症に対する治療戦略に関する特集を組ませていただいた。

わが国の「原発性骨粗鬆症の診断基準」は2013年に2012年度改訂版が発行され、同時に診断に際して重要な椎体骨折評価基準も改訂されたが、診断基準の改訂内容は、既にわが国の「骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン」2011年改訂版の薬物治療開始基準に盛り込まれていた。これら診断基準と薬物治療開始基準について、まず紹介していただいた。次いで、骨粗鬆症治療薬が次々と登場し選択肢が増えたが、原発性骨粗鬆症に対する使い分け、逐次、併用療法、さらには治療効果判定について概説していただいた。最近、骨折の連鎖を断つための種々の運動が世界中で展開されているが、わが国でも日本骨粗鬆症学会が主導し、骨粗鬆症リエゾンサービスがスタートしつつある。そこで、これら国内外の活動について紹介していただいた。

続発性骨粗鬆症にはさまざまな疾患、薬剤などに起因するものがあるが、近年、生活習慣病との関連が注目され、2010年には日本骨粗鬆症学会から「生活習慣病骨折リスクに関する診療ガイド」が発行されている。そこで、生活習慣病と骨粗鬆症について概説していただいた。ステロイド性骨粗鬆症については、日本骨代謝学会から管理と治療ガイドラインが2004年度版として初めて発行された。今回2014年度改訂版が発表されたので、その内容について紹介していただいた。

各種疾患において治療目標が設定されてきたが、骨粗鬆症の治療目標設定は、現在世界中のメンバーが参加して委員会活動が進行中である。現在いくつかの治療目標の候補が挙げられており、最後にその内容を概説した。本特集が日常診療の一助となれば幸いである。